
Phantom Buster MIYU

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Phantom Buster MIYU

【コード】

N1288B

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

瀬川美由、16歳の女子高生。実は彼女は「ファントムバスター」として妖魔退治を続ける少女だったのだ！

プロローグ

1988年、秋。

結果的に昭和最後の秋となったこの年、世の中が「自粛ムード」となっていて、どこことなく日本全体が沈みがちだったある日。

夜のビルの屋上に25〜6歳くらいの一人の男が立っていた。男の右手にはなぜか剣が握られていた。

「…もうそろそろのはずだが…」

その時だった。

「…よっちゃん、聞こえる？」

男が左手に持っていたトランシーバーから女の声が聞こえた。

「…追い詰めたのか？」

男がトランシーバーに向かって話しかける。

「うん。今、そっち言ったわよ！」

トランシーバーの向こうにいるであろう女が叫んだ。

「わかった！」

「気をつけてね！」

「わかってるって！」

屋上にいた男が叫ぶ。

そして男は剣を構えると静かにその時を待っていた。やがて

「…来た！」

男はそう直感した。

やがて男の目の前に異形の生物　怪物と言うべきか　が現れた。

その身の丈は優に2メートルはあり、凶悪な顔つきだった。

怪物が男に向かってその巨大な手を振り下ろす。

男はすんでのところでそれをかわすと、

「せえいつ！」

気合一閃持っていた剣を横殴りに払う。

怪物が断末魔の叫びを上げる。

と、その様子を男の向かい側で見っていた女　先ほどまで男とトランシーバーで会話を交わしていた　がその怪物に向かって首から下げていた鏡を向けた。

その鏡に怪物が吸い込まれていき、次の瞬間には怪物は消滅していた。

「…大丈夫？」

女が男に駆け寄ってきた。

「…ああ、大丈夫だ。それよりそっちはどうなんだ？」

「こっちもバッチリよ」

そついうと女は鏡を取り出した。

2、3回振ると鏡の後ろ側に開いていた穴からコロソ、とガラス球状の物体が転がり落ちてきた。

「…よし、後は事務所に届けに行くだけだな」

そして二人は地上に降りると男の運転する車で走り去って行った。

*

車の中。

「…今日も大変だったね、よっちゃん」

助手席に座っていた24〜5歳の女性が運転席の男に話しかけた

「あ、ああ…」

よっちゃんと呼ばれた男はその言葉も何処か上の空で聴いているようだ。

「…どうしたの、よっちゃん？」

「…いや、そのな、由紀子」

「…なに？」

「そろそろどうかな、って思ってな…」

それを聞いた由紀子と呼ばれた女性は思わず吹き出してしまった。

「…おい、なにがおかしいんだよ」

「ゴメンゴメン。実はその言葉、待ってたのよ」

「え？」

「だってあたし達だって高校の頃からの付き合いだし、高校を卒業してからもずっとパートナーとなってやってたんだもん。いつ来るのかな、と思ってたけどなかなか言い出さないからさ」

「じゃあ…」

「勿論、断る理由なんてどこにもないわよ。幸せな家庭作ろうね、よっちゃん」

「勿論さ」

1989年3月、瀬川義和・小林由紀子 結婚。

*

1991年3月。

病院の前に一台の車が停まると、中から義和が飛び出てきた。

先ほど病院から連絡があり、「奥さんが産まれそうだ」と言う話を聞き、こっして駆けつけた、と言うわけである。

「…あ、瀬川さん！」

顔なじみの医師が義和に駆け寄る。

「…由紀子は？」

「先ほど分娩室に入りましたよ。なんでももうすぐ産まれるようですよ」

「もうすぐ産まれる」と言われながら既に30分近く経ち、義和は分娩室の前を行ったり来たりしていた。

それからどのくらい経っただろう。不意に分娩室の中から赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。

「…産まれた！」

義和はそう直感した。程なく、

「あ、お父さん、おめでとーございます」

「元気な女の子ですよ」

分娩室の前から医師や看護師が出てきた。

1991年3月、瀬川家長女・美由 誕生。

*

1996年11月。

5年前と同じ病院の同じ分娩室の前。

義和は5年前と同じく分娩室の前でそのときを待っていた。

ただ、前の時と違うのは彼の傍らには5歳になる娘がいることだった。

「…そうか、もうこの子も来年は小学校に行くんだな…」

義和は自分の隣にちよこんと座っている娘の美由を見て思った。

彼女も5年前にこの病院で生まれていて、医師や看護師の中には美由をみて「こんなに大きくなったのね」と言っている人もいるが…。

(…この子はひとり家族が増える事をどう思っているのかな?)

勿論母親が数日前から入院していることは知っているし、彼女が通っている幼稚園では「もうすぐお姉ちゃんになる」と友達に話しているそうだが、果たして自分にきょうだいができる、とはどういうことなのかもしれない。わかっているわけではないのだろうか？

そう思いながら美由の顔を見る義和。

そんな父親の顔を娘は不思議そうに眺めていた。

それから程なく、分娩室の中から5年前と同じように赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。

「…生まれましたよ」

「お父さんそっくりの男の子ですよ」

「ほら、美由。おまえに弟が出来たぞ」
「弟？」

「…そうだぞ、美由はお姉ちゃんになったんだぞ」

1996年11月、瀬川家長男・和也 誕生。

*

そしてこの一家はどこにでもありそうな普通の家庭生活を送っていた。

ただひとつ、瀬川家には一般の家庭とは違っている部分がある点を除いては。

(第1話に続く)

第1話

2003年・春。

いつの間にか瀬川家の二人の子供　娘の美由は間もなく小学校を卒業し中学生に、息子の和也も春から小学生になるうとしていた。そんな中、義和と由紀子の夫婦は相変わらず「例の仕事」を続けていた。

ある日の夜のことだった。

「…あなた、そっちへ行つたわよ！」

由紀子が言う。さすがに10数年も主婦をやっているといつの間にか義和の事を人前では「お父さん」、二人でいる時は「あなた」と呼ぶのが普通となつているようだった。

それを聞いた義和が剣を構えてその時を待っていた。

そして義和の目の前に怪物が現れた。

義和は剣を構えると上段の構えから振り下ろした。

「…やった！」

ところが、である。怪物に致命傷を与えるまでには至っていなかった。

「なんだって！」

自分が想像していたより傷が浅かったようだ。

手負いの怪物は義和に襲い掛かる。

義和も必死になって応戦するが、押されているようだ。

既に年齢も40歳近くなっているから、20代の頃と比べると明らかに体力は落ちているし、家庭を持った、という事で守りに入ってしまうのだろうか？

何とか怪物の猛攻をしのぐと、義和は相手の隙を付き、剣を横殴りに払う。

怪物が断末魔の悲鳴を上げると共に、由紀子が鏡を使って怪物を封印した。と、

「…うっ！」

いきなり義和が腰を抑えて片膝を付いてしまった。

「…大丈夫！」

由紀子が近づく。

「だ、大丈夫だ。ちょっと腰に来たくらいだ」

「本当に大丈夫？ 無理するんじゃないわよ。何なら帰りはあたしが運転していくから」

「あ、ああ、頼む」

帰りの車の中。さっき言ったとおり、車の中は由紀子が運転し、義和が助手席に座っていた。

「どうも最近は前と比べててこずるようになったな…」

「…それだけ相手が強くなった、と言う証拠かしら？」

「…それもあるかもしれないけど、オレも体力が落ちたかもしれない…」

「…そうかもしれないわね。というかあなたみたいに40歳近くなつても続けている人、ってまずいないらしいわよ」

「らしいな。大抵は30半ばで後進に道を譲るために引退するらしいからな。スポーツ選手と一緒に」

「…その事なだけどね、そろそろどうかしら？」

「美由を、か？」

「そう。あの子、前からそういうことに興味を覚えてきたみたいだし、最近覚醒したからか、そういうたこと真似事を学校でやっている、って話よ」

「待てよ。確かにオレ達のような夫婦の間に産まれた子と言うのはほぼ間違いなく、その力を受け継ぐらしいからな。美由や和也がそういう力を持っていたっておかしくないし。でもまだ美由は12歳になっただけだぞ」

「…確かにそうだけど、中には10歳くらいで覚醒している子もいる、って話よ。そういう子たち、って両親や知り合いの元で2〜3年一緒にやってから独り立ちする、って言うし…。それに、もし和也が覚醒したとしたら…」

「…やれやれ。オレたちはどうやら大変な血を持って生まれたようだな」

*

二人が何をしているのか、そろそろ説明をしなければならぬであろう。

義和は普段は普通に会社勤めをしているのだが、実は時々妻である由紀子と二人で「ファントムバスター（以下PB）」と呼ばれるいる妖魔退治業をしているのだ。

それではその妖魔とは何か？

昔から「物の怪」とか「妖怪」と言った所謂「異形のモノ」の話は全国各地に伝えられているが、それらは決して空想の産物ではないのである。

そういつた生物の目撃談を一笑に付す人物も世の中に入るが、だからと言ってそういつた「異形のモノ」の存在は本当に否定できるものなのだろうか？

そう、実はその存在は我々が気づいていないだけで太古の昔からそれらはこの世界に存在していたのだ。

そしてそれらの存在は一括して「妖魔」と呼ばれているのである。そして妖魔のほとんどは我々の生活に災いをもたらすものである、と言うことも。

ただ、妖魔にもランクと言うものが存在しており、それほど力のない妖魔だったら御祓いを受ければ済む事が多いのだが、中にはその程度では済まないような力を持った妖魔も存在し、それらの妖魔を退治する、となるとPBの出番となるのである。

そして義和と由紀子のふたりはそのPBである、と言うわけである。

実はPBの能力自体と言うのは人間だったら、誰でも持っているものなのだ。誰でもそこには誰もいないのに誰かに見られている、とか誰かが傍にいるような感覚がする、と言う経験があると思うが、それは誰もがPBとしての素質を持っている、と言う証拠なのだ。但し、だからと言って誰もがPBになれる、と言うわけでもない。例えばスポーツ選手がその方面の技術に卓越した能力を持っているのと同様、PBになるためにはそれ相当の能力がなくてはならないのである。

そして自分がその力を持っている、と自覚し、その力に目覚める（PBの仲間の間ではこれを「覚醒」と呼んでいるが）、と言うことも…。ただ「傍に誰かがいるような気がする」と言ったような感覚では全く駄目なのである。

そして（当たり前まえではあるが）例え覚醒したとしても、既にPBとして活躍している人物の元で修行を積み、その師匠からお墨付きをもらって初めて独立できるのである。

例え人間が誰でもPBになれる能力を持っている、といってもその中で覚醒するのは1万人にひとり、と言った程度だし、さらにそこからモノになるのは10人の中でひとりいるかいないか、である。

このように一人前のPBになるのは、他の職業と同じように厳しい道なのである。

そして義和と由紀子の二人もその力が覚醒し、ある日ひよんなきっかけで同じ高校に通っていた義和が妖魔を倒すのに使う真剣を、由紀子が妖魔を封印して宝石状の石に変えてしまう魔鏡を持っていたことがわかり、いつの間にか二人で組むようになっていたのだ。そして高校を卒業してからも二人が組んで妖魔退治を続け、こうして夫婦になった今でも二人で続けているのである。

そしてそんな二人もいつの間にかもう三十路を超え、40になるうとしていたのだった。

P Bにも全国的組織である協会が存在しており、そこに登録すれば、本人が死亡したり、と言った協会が特に認められたもの以外はその資格は一生通用するのだが、実際には義和たちのように30代後半になってもP Bを続けているのは少なく 勿論中には50代、60代でもP Bをしているものもあるが 大抵は30代半ばで引退し、(家族であるかどうかは関係なく)後進に道を譲るのが普通なのである。

ただ、不思議なことにこのP Bになるための能力は、どちらかの親がP Bとしての能力を覚醒していれば半分以上の確率で、両親ともその能力が覚醒していれば90%以上、あるいは100%の確率で子供もP Bとしての能力を持つ、と言われている。実際、義和は祖父の代からそういったP Bの能力を持っていた、と言うし、由紀子の方も、そういった能力を持っていた祖先がいたらしい。

それに、実際に先祖代々受け継いでP Bを続けている、と言う人物も多いのだ。

勿論親がP Bであり、自分のその力に覚醒しているからと言って親の仕事を引き継ぐがどうかはその子の自由であるが、ほとんどの子供は親の後を引き継いでいると言う。

そういうことから言ってこの二人が自分の子供たちの将来を考えている、としても不思議ではないのである。

*

「…でも、本当に美由は大丈夫かしら？ あの子、あれで意外とおっとりとしているところがあるから…」

「…確かにそうかもしれないが、あの子は思ったことは最後までやり遂げる子だからな。…とりあえず暫くは様子を見てみるか」

「…それがいいわね」

*

そして暫く経つと義和と由紀子の仕事をしているところに美由の姿を見るようになった。

それから間もなく「和也がひとりになってしまっから」と息子の

世話をするために由紀子が一足先に現場を離れて（勿論彼女が持っている鏡を美由に引き継がせた）、美由は義和の下で修行を積んでいた。

*

そして2006年・春。

受験勉強の合間に父親の元で修行、と忙しい日々を送っていた美由だが、何とか志望校に合格することができ、高校の入学式を控えたある日の事。

リビングルームに美由と両親が向かい合って座っている。

「…それでお父さん、お母さん。話ってなに？」

3月生まれゆえ、先日15歳になったばかりの美由はまだ幼さをどことなく残してはいるが、その顔つきはすっかり大人になっていた。

「…あ、いや、その…、大事な話なんだ」

義和がそう切り出した。

「…大事な話、ってもしかして…」

美由も父親がこれから自分に話す内容にうすうす感じているか、緊張した面持ちだった。

「…おまえもそう思っていたか。いや、おまえももう高校生だし、…どうだ、そろそろ独り立ちしてみないか？ 実はお父さんも40過ぎてるから、そろそろ引退を考えているんだ。協会への登録変更届とかはお父さんの方でしておくから」

「…独り立ち、って…。まだあたしそんなレベルじゃ…」

「いや、お前はもう十分一人でやっていけるレベルだと思うし、おまえを3年間、お父さんの下でやらせてみて、おまえは物凄い力を持っているらしいことがわかった。もしかしたらお父さんの事を超えることが出来るかもしれない」

「…そんな。あたしがお父さんを超える、なんて何年掛かっても出来ないわよ」

「いや、おまえならきつとお父さんを超越ることが出来るさ」

「…それにね、美由。将来、あなたに和也の先生になって欲しいのよ」

「和也の？」

「そう。まだ和也は覚醒していないけど、あの子も最近、自分がそういう力を持っていることがわかってきたらしいのよ。だから、もし和也がそういった力に覚醒した時は、あなたに先生になって欲しいのよ」

「…お母さんの言うとおりだ。お父さんだってお前くらいの年の時に父親　つまりお前のお祖父さんだな　から独り立ちしたし、おまえだっていつかは一人でやっていかなければいけないんだ。どうだ？　お前もそろそろ一人でやってみないか？」

美由は何も言わずに暫く考えていた。やがて、

「…わかったわ、お父さん。やってみる！」

「…そうか、やってくれるか」

「…あたしなんかまだまだお父さんのレベルなんかじゃないけど、いつかはひとりやらなければいけないんだもんね。やってみるわ」

「…よし、わかった。今からお前にこれを渡そう」

そういうと義和は一振りの剣を差し出した。

その剣は美由も見覚えのあるものだった。なぜなら、いつも父親が持っていたものだから。

「お父さんが父親から受け継いで使っていた神剣だ。今日からはお前がこれを使うんだ」

美由は剣をじつと見る。

見た限りでは確かに年期が入っており、所々傷みや補修した跡が入っている。しかし、鞘から少し出してみた刀身は新品同様の輝きを保っていた。

「…お父さんやお祖父ちゃんが使っていた剣を、あたしがうまく使えるかしら…？」

「だいじょうぶだ。お前ならうまく使える」

「…それとね、美由。もう判ってると思うけど、お母さんが美由に渡した鏡は、妖魔を封印するためにとても大事な道具なのよ。だからその剣もそうだけど、あなたを守る大事な道具だから大切に扱っ
のよ」

「…わかってるわよ」

*

そして2007年・春のある日の夜。

あたりは誰もいなく、ただ、数台しか車が停まっていないうち駐車場をライトが煌々と照らしていた。

そこへ一人の片手に剣を持った少女が息を切らせながら走ってきた。

「…確かこのあたりに来た、と思ったんだけど…」

少女 瀬川美由は辺りを見回す。

既に夜が遅いと言うことと、ここは郊外だからと言うこともあってか人通りも少なく、辺りは静かである。

それでもここに逃げてきたはずだ。

美由は息を殺してあたりの様子を伺う。

不意に美由は気配を感じた。

そして辺りを見回す。…と。ある一点で視線が止まった。

車の陰で何か動いたように思えたのだ。

「…そこっ！」

美由は叫ぶとその車に向かって走っていった。

すると、車の陰から突然怪物が飛び出してきた。

しかし美由は剣を両手で持つと怪物に向かって右下から左上になりぎ払った。

怪物が断末魔の悲鳴を上げる。

美由は胸に下げてある鏡を取り出し、怪物に向けると怪物が鏡の中に吸い上げられる。

美由が鏡を振るとカラカラとなにやら音がした。

「…一丁拳がり、と」

そして美由は剣を鞘の中にしまつと、ポケットから携帯電話を取り出し、ダイヤルボタンを押す。

「…もしもし。あ？ お母さん？ …うん。今、終わったわ。じゃあ今から帰るから。うん。じゃあね」

そして美由は電話を切ると駐車場を後にした。

父親である義和からこの仕事を任されてはや1年。まだまだ父親のレベルには遠いし、今まで父親がやっていた事を今度は自分がやらなければいけないから、確かに大変な事は大変なのだが、ようやくこの仕事にも慣れてきた。そして自分がどういう立場で、どういうことをなすべきかも…。

とは言え美由だって家に帰れば普通の女の子。色々やりたい事だつて一杯あるし、高校生として勉強もしなければならぬ。

でも、決して辛い、とか大変だ、とかは言いたくなかった。

なぜならばPBと言う仕事は自分に与えられた使命なのだから。

(第2話に続く)

第2話

2007年4月のある日。

美由が通っている高校も今日が始業式である。

「…ふう、なんかもう2年生、って感じだわ…」

校舎に入ると、この間16歳になったばかりの少女は大きくため息をついた。

勉強の合間にPBとしての仕事もしているから、なんだか訳のわからないうちに1年が過ぎてしまい、更に自分が3月生まれだということもあってか、いまだに2年生になった、と言う実感がわいてこない。

とは言えようやくこの生活にも慣れてきたのも事実ではあるが…。

*

そしてクラス替えなどが終わり、全生徒が体育館に集まって始業式が始まった。

その中で美由の通っている高校に男性と女性、それぞれ一人ずつ二人の教師が転任してきた、ということで行なわれた。

「…それでは紹介します。4月1日付で本校に新任となりました三上先生と、冴木先生です」

「三上です」

男のほうの教師が挨拶をすると、続いて女の教師が、

「冴木です、よろしくお願いいたします」

と挨拶をする。

そのときだった。

「…！」

不意に美由は何か身体にぞくつ、とする感覚が走つたのを覚えた。

思わず縮み上がる美由。と、

「…どうしたの、美由？」

美由の後ろに並んでいるクラスメイトが話しかけてきた。

「あ、な、なんでもない」

慌ててごまかす美由。

(…なんだろう。今まで感じたことのないこの感覚は？)

風邪をひいた時などでよくある感覚ではない。身体の芯から感じるような寒さだったのだ。

今までもそうだった感覚がなかった訳でもないが、今回のそれは今までは全く比較にならないほどの強い感覚なのだ。

(…一体なんだろう…?)

結局その感覚はそのとき限りで、結局その後は一度も起こらずにその感覚の正体がなんだったのか、美由にはわからずじまいだった。

*

それから数日たったある日の朝のこと。

二人の女生徒が校門の前に立っていた。

二人とも同じ方角を向いていた。…と、

「…あ、来た！」

一人の女生徒が叫んだ。彼女達の見ている方角から美由が歩いてきたのだ。

「美由！ ちょっと来て！」

もうひとりの女生徒が叫びながら美由を手招きした。そう、彼女達は美由のクラスメイトだったのだ。

「…あ、おはよう。どうしたの、一体？」

美由は二人のクラスメイトの姿を見て言った。

「挨拶はいいから。とにかく来てよ！」

そういうと一人の生徒が美由の手を引っ張る。

「ちよ、ちよっと！ 一体何があった、って言うのよ！」

美由が連れてこられたのは学校の裏庭だった。

既に何人も生徒がそこに集まっていた。

「あ、ちよつとゴメンね」

そう言いながらそのクラスメイトは生徒達をかき分け、美由を木の前に連れてきた。

「…ちよつと、一体どうしたのよ？」

「これ、見てよ」

美由を連れてきたクラスメイトが一本の木を指差した。

「…これは…」

思わず美由も絶句した。

そう、その気の真ん中あたりが何かでくりぬかれたかのような大きな穴が開いていたのだった。

しかもその穴と言うのがヤスリか何かで磨いたかのように綺麗になつていたのだ。

「…いったいどうしたの？」

美由が聞くと、

「けさ、登校して来た子が見つけたんだって。昨日まではこんな穴なかったのに…」

美由はその穴に近づくと、じつくりと観察をする。

「それにしても…。ドリルか何かで開けたにしては穴がきれい過ぎるわね…」

「うん。だから、誰がどうやって開けたのかわからないのよ」

「ねえ、美由、何かわからない？」

それを聞いた美由、思わず「へ？」と言う表情になり、

「…ちよつと、何であたしに聞くのよ！」

「だって美由、PBでしょ？」

「PBって言うのはあくまでの妖魔退治が目的なの。大体これだつて妖魔の仕業かどうかわからないでしょ？」

「そりゃそうなんだけど…」

「…とにかくあたしも調べてはみるけど、何かあったらまた教えてね」

「う、うん」

*

それから数日後、例の木に大穴が開いた事件もまだ生徒達の間では話題になっていたある日の朝のこと。

今度はある教室のガラス窓が一斉に割られると言う事件が発生した。

しかも1枚や2枚、と言う訳ではない。その教室の窓ガラス全てが割られていたのだ。

ただ不思議なことにそのガラス窓は教室の中から割られたか、外にガラス片が飛び散っていたのだ。

しかも、学校の周りに住んでいる人の話だと、夜中のある時になにやらガラスの割れたような音が一度して、それきりだったと言う。

もしその言葉が正しいとすると複数の人間で同時に全てのガラスを割ったことになるが、一体どれくらいの間が必要で、そしてそれこそ寸分の狂いもなく一斉にガラスを割ることなんてできるだろうか？

それに、その時間にそれだけのガラスを割ることができるほどの人間が学校に入るところを見たものは誰もいなかった、という。

更に警察も捜査を始めたが、これと言った手がかりが見つからない、と言う。

そして当分の間、その教室は使用禁止、と言うことになってしまった。

*

そういつた事件があつて以降も学校でグラウンドに大きな穴が開いていたり、コンクリートの一部が爪か何かで引っかいたかのようにえぐられる、と言う事件が起こっていた。しかもその原因が全くと言っていいほど分らず、仮に人間の手で起こしたにしては余りにも不自然な点が多い、と言うことだった。

「…と言うわけなの」

そんなある日の夜。美由は学校であった幾つかの事件を義和と由紀子に話していた。

義和からPBの仕事を受け継いだ今でも、こうして美由は二人に相談をし、義和たちも美由の「先輩」としてアドバイスをしていた。「…そういうことがあったの…」

美由から話を聞いた由紀子はそういうのが精一杯だった。

「…とにかく、何故その学校ばかりで起こるのか、と言うのが気になるな」

義和も言う。

「…あたしも色々調べてはみてるんだけど、アレだけの事を人間の力でやるなんて無理よ」

「じゃあ、美由は一連の事件は妖魔の仕業だ、って言うのか？」

「断定はできかねないけど、そうかもしれない、って思うの。だってどう考えたって人間の力であんな事をやるなんて無理よ。おまけに友達があたしに『何とかしてくれ』って頼み込むのよ」

「それは災難だったな。…でも調べてはいるんだろ？」

「…うん。もつと詳しく調べたいことがあるんだけど…」

そういうと美由は言葉を濁してしまった。

「…どうした？」

「…どうも色々な証言を照らし合わせてみると、事件が起こるのは夜遅くなってからのよ」

「…そうか。最近は学校の夜になるとセキュリティの関係で門を閉めるからな。…わかった。そっちはお父さん達が協会のほうに頼んでみるから。美由はとにかく昼の間に調べられるだけのことは調べてみる」

「わかったわ」

*

そして翌日の昼休みのことだった。

美由はその大穴が開いた木の傍に立っていた。

確かにこんな綺麗な形で木に大穴を開ける、なんて普通の人間に

は無理であろう。

(…となる…)

美由は制服のブレザーのポケットから神鏡を取り出した。さすがに神剣は持ち歩けずに家に置いてあるのだが、こうして神鏡は肌身離さず持っているのだ。それにいつもは普通の鏡としても使えるから何かと便利だし…。

美由はその神鏡の鏡面をその木に向けた。

父親の義和が言っていたのだが、もし、この木を開けたのが妖魔の仕業ならばしくは僅かではあるが反応が残っているからだ。

…と、鏡の裏面についている宝玉が弱々しいながらもほんのりと光を放った。

「…これは…」

母親である由紀子からこの鏡を受け継いだ時に聞いたが、もし妖魔の反応が少しでもあったとしたら光を放つはずなのだ。

もちろん、普段はこんな弱々しいしいものではなく、例えばすぐ近くにいればかなりの強さで光るのではあるが。

「…となるとこれは…」

この穴を開けたのは妖魔だというのだろうか？

その後も美由はガラスの割れた教室や、コンクリートが削られた場所で神鏡を向けてみたのだが、どこもかしこも同じような反応があったのだ。

*

そしてその翌日のことだった。

今度は何者かによって教室の一部が破壊される、と言う事件が起こった。

「…もしかしたら…」

美由はそう呟くとポケットから神鏡を取り出した。

すると、今まで以上に強く宝玉が光を放ったのだった。

「…やっぱり…」

美由がそう呟くと、後で見えていたクラスメイトが、
「…やっぱりって、美由…。これって人間の仕業じゃない、ってこと?」

「そういうことになるわね。大体人間が木にあんな風に綺麗な形で穴を開けたり、教室中のガラスを一斉に割るなんてできないわよ」

「…やれやれ。となると、もう美由に任せるしかないのか…」

「…任せる、ってそんな…」

「でも美由はPBなんですよ? こういうことできるのはもう美由しかないんだから。ね、お願い」

「…仕方ないわね…」

「でも、気をつけてね」

「わかってる、って」

*

そして夜。

学校の正門に一人の少女がいた。

言うまでもなく美由である。

これまでの目撃証言から分析すると、次々と起こっている不可解な現象は夜に成ると起こっているらしい、と言うことがわかったのだ。

そこで夜に張り込んでみよう、と言うことになったのである。

美由は普段は家に置いてきている神剣を右手に持つと、門扉を引く。

父親が前もって学校に話しておいてくれたからか普段はしまっている門扉も簡単に開き、美由は中に入ってしまった。

そして懐中電灯で辺りを照らすと、目撃情報のあった辺りを丹念に調べて回った。

そもそもの事の発端となった大穴を開けられた木もあの日のままの姿でそこに立っていた。ただ、あの頃と違うのは「危険 近づかないこと」と言う貼り紙が貼られていることだったが。

「…これと言っておかしいところはないけど…」

あの日からも美由は色々調べてみたのだが、現場はあの日のままの状態でこれと言って変わったところはない。それに2日前に調べた時より妖魔反応も薄くなってきたのか、宝玉の光もかなり弱くなっていた。

と、不意にいつもはポケットに入れているが、こういう妖魔退治の時には首からぶら下げている神鏡の宝玉が光った。それも弱い光ではない。はっきりとした光である。

「…いるの？」

美由は辺りを見回す。すると上のほうでなにやら物音が聞こえた。

「…まさか!」

美由は懐中電灯で、学校の屋上の辺りを照らす。と、何かが動いたように思えた。

「屋上にいるの？」

そして美由は近くにあった非常階段から屋上に向かって昇っていた。

*

「はあ…はあ…はあ…」

美由は大きく息を切らせた。そして屋上へと続く扉の前に来ていた。

勿論途中途中で確認もしていたが何者かがいる様子はなかった。

「…となると後はここしかない訳よね…」

美由は大きく深呼吸をして息を整えると、ドアのノブに手をかける。

そしてドアのノブを開けると、屋上に飛び出した。

神剣を構えると辺りの気配を窺う。すると、

「…左？」

不意に左の方から何かの気配が来るのを感じた。

美由は左の方向を向く。

と、一匹の妖魔が美由に身かつて襲い掛かってきた。すんでのところまで攻撃をかわし、美由は神剣を構える。すると妖魔の右手が鋭い錐のようになる。

「もしかしたら、あの木は……」

そう、この妖魔がやったものだろうか？

そんな事を考えている美由に妖魔が襲い掛かり、錐状になった右腕を美由に向かって突き刺そうとする。

慌てて美由はそれをかわすと横殴りに払う。

妖魔が悲鳴を上げる。

そして、美由は後から妖魔を袈裟切りにする。

妖魔が断末魔の悲鳴を上げる。

美由は胸からかけていた鏡を妖魔に向ける。

そして妖魔がそれに吸い込まれていった。

「ふうっ……」

妖魔を退治した美由がひとつため息をつく。…と、

「？」

美由は辺りを見回す。

「…なんだろう？」

そう、何やら別の気配を感じたのだった。

そしてあたりを探すが自分のほかには誰もいなかった。

「…気のせい…じゃないわね。確かに誰かいたはずだもの……」

美由は「気配」が一体なんなのかよくわからなかった。

(第3話に続く)

第3話

2007年7月。

いつの間にか季節は移り夏となっていた。

美由も勉強とPBの仕事と言う両立にあいも変わらず忙しい日々を送っていた。

しかし、である。4月に起こった不思議な出来事は3ヶ月経った今も多少は少なくなっただとは言え、まだ教室のガラスが割れたとか学校の備品が何者かによつて破壊された、と言う事件は時々起こっていた。

そのたびに彼女が駆り出され、何度か妖魔退治はしているのだが、一時は収まったかと思いきやすぐに新しい事件が発生するのだ。

この3ヶ月、彼女の気が休まる日といったら本当に数えるほどしかなかった。

そんなある日の夜のこと。

「…ただいま…」

美由が玄関を開けて家に入った。右手に神剣を、首からは神鏡をぶら下げており、丁度妖魔退治から帰ってきたところだった。

「おかえり。疲れたでしょう?」

母親の由紀子が美由を出迎えた。

美由はリビングルームを玄関から覗くと、

「…和也はもう寝たの?」

「もうとっくよ」

「…そうよね。もう11時近いもんね」

そう言つと美由はキッチンに入り、椅子に腰掛けると、

「はあっ…」

大きいため息をついた。

「…本当にこここの所大変ね」

由紀子が美由に言う。

「そう。なんかこの所、急にこういった騒ぎが多くてさ」

「お父さんも言ってたけど、確かにこの所急に発生件数が増えて
いる、って。それに、ちよつと気になることがあって…」

「気になること、って？」

「発生件数が増えたのって春になってからなんですって」

「確かにそうよね…。あたしが2年になってから急に増えだした気
がするし。なんか関係があるのかしら？」

「そこまではわからないわよ。お母さんだってお父さんだってPB
やってた頃はある一時期物凄く忙しかったのに、それとは逆にほと
んど用事がない、って時もあつたし」

「…だといいんだけどね…」

「…何か気になるの？」

「ちよつとね」

そう、この所美由は例の「悪寒」が夏だというのに時々起こつ
ているのだ。一体それがどういふことなのかよくわからないし、別
に健康状態が悪い訳でもないから両親には黙っているのだが…。

「…まあとにかく、お風呂も沸いてるし、お母さんももうすぐ寝る
から、美由ももう寝なさい」

「はい」

そして美由は自分の部屋に着替えを取りに行った。

*

そんなある日の授業中のことだった。

美由は今までの事件の事を振り返っていた。

(…それにしてもどうしてこう最近…)

そう、今年に入ってから既に半年以上経ってるが、年が明けてか
ら3月までと比べると4月以降の3ヶ月では美由が何らかの形で関
わっている事件が明らかに増えているのだ。

しかもどういふわけだ過疎に事件も学校周辺で起きている、

(…一体何か共通点があるのかしら…?)

美由はこれまで自分が関わった事件の事を思い出していた。

(…そういえばあの時…)

と、美由がそこまで考えた時だった。

「…がわ。瀬川！」

美由を呼ぶ声が聞こえた。

見ると美由の座っている机の傍らに教師の三上が立っていた。

「…は、はい。なんですか？」

「なんですか、じゃない。授業中だろ！」

「え、ええ…」

「大体、最近のお前は授業中、ぼーっとしている事が多いな」

「そ、それはその…」

「そういえば最近、夜に出歩いている、と言う話じゃないか。何を
してるんだかわからんが、高校生の本分は勉強にあるんだ。その事
を忘れるな」

そう言うと三上は美由の席を離れた。

*

「…どうしたの、美由？ 本当に最近」

「ま、まあね」

「やっぱり三上先生の言ったように、PBの仕事で疲れてるの？」

「そういうわけでもないんだけどさ。やるとなると、どうしても放
課後になっちゃうからさ…」

「そう言えば美由って三上先生と随分相性悪いわね。よく怒られて
るじゃない」

「そ、それはその…、ああいう先生、好きになれなくてさ」

「えー、いい先生じゃない」

「そうかなあ…。なんか気に入らないのよねえ」

「…じゃあ、美由は冴木先生も気に入らないの？」

「どういうこと？」

「だって冴木先生とも相性が悪そうだしさ…」

「そういつわけじゃないんだけど…。何か気に入らない部分があるのよね」

「そういえば三上先生、美由がPBしてるの知らないみたいね。もうこの学校に来て3ヶ月になる、って言うのに」

「…それはその、話しそびれているだけ。別にいちいち教えることもないでしょ？ PBやってるのはあたしだけじゃないし」

「だけど、このへんでやってるのは美由だけでしょ？」

「ま、そのうち三上先生だってわかるとおもうわ」

クラスメイトの言うとおり、美由はこの春に転任してきた教師

三上公平と冴木法子 とうとうも相性が悪いのだった。

別に表立った対立とかそうだったことはないのだが、どうもこの二人の教師が好きになれなかったのだった。

何故かはわからないが、どうも気に入らない部分があるのだ。それが一体なんなのか、美由もよくはわからないのだが…。

*

それから数日たち、夏休みを間近に控えたある日のことだった。

「あ、美由。ちょっといい？」

校門に入ったところを美由はクラスメイトに呼び止められた。

「…また起きたの？」

美由がそう聞くとそのクラスメイトは何も言わずに頷くと美由の手を引っ張る。

「これは…」

「…そう、いつもと一緒によ」

そう、例によって地面に何かで開けたような大穴が開いていたのだった。

「…本当に最近、よく起きるわね」

「やっぱりこれも妖魔の仕業かしら？」

「美由、調べてみて」

「…ちょっと待ってて」

そう言つと美由は着ていたブラウスの中に手を入れると首から神鏡を取り出した。夏服の間はこうして首からぶら下げているのである。

「あ…」

神鏡の真ん中に飾つてある宝玉が光つたのだつた。

「…これは…」

間違いない、妖魔の仕業だ。

「…美由の出番、つてこと？」

クラスメイトが美由に聞いた。

「そういうことになるわね」

「…ゴメン、美由。この間引つ張り出したばかりだというのに、また引つ張り出して」

「いいのよ。もう慣れっこだから」

そう言つて、美由が神鏡をしまったときだつた。

「…!!」

例の悪寒が美由の全身を襲つたのだ。

思わず縮こまる美由。

「…どうしたの？」

「ん？…な、なんでもない」

そして注意深く周りを見回す美由。

何のことはない、そこにはいつもどおり、生徒や教師が何人か美由の行動を見ているだけであり、別に怪しい部分は見当たらない。

(…なんでまたこんなところで…)

そのときだつた。

(…そういえば…)

美由が最近、やたらと悪寒に襲われることに気がついたのだ。それも、春になつて彼女の周辺で起きる事件の件数が増えるのと比例するようになつてきている。

(…なんで急に増えてきたんだろう…)

美由はその理由がよくわからなかった。

*

その日の夜。

美由はその空き地で神剣を構え、目を閉じて「その時」を待っていた。

色々調べてみた結果、どうやらこの辺に妖魔がいることに気がついたので。

そしてその妖魔を追い詰めてここまで来た、という事である。

「…来た！」

美由は気配を感じると目を開いた。

美由の目の前に彼女より一回りは大きいであろう、妖魔が現れた。そして美由に向かって襲い掛かってくる。

美由はそれをかわすと、神剣で横殴りに払う。

妖魔が悲鳴を上げる。

そして美由は今度は背中から袈裟切りに切りつける。

そして間をおかず、神鏡を取り出すと妖魔にそれを妖魔に向ける。

妖魔が断末魔の悲鳴を上げ鏡に吸い込まれていった。

「…終わった…」

いつもどおりの仕事を終わると美由は携帯電話を取り出す。

「ええ〜っ？ もうこんな時間？」

そう、携帯電話の時計は12時近くなるうとしていたのだった。

「急いで帰らなきゃ！」

そして、家に帰ろうとしたときだった。

「…うっ！」

美由の全身を「あの」悪寒が駆け巡った。

(…なんでこんな時に?)

妖魔がまだいる、と言うことか？

美由は首からぶら下げていた神鏡を取り出す。しかし神鏡の宝玉は何の反応も起きていない。

(一体どういうことだろう?)

しかし、その悪寒もすぐに治まった。

(…なんでこうも最近…)

そう思いながら美由は歩き出した。

美由が「覚醒」をする少し前あたりからこのように妖魔が近くにいるとこのように悪寒を感じるのです。そのこと自体は余り気にならないのだが、最近はいくらなんでも多すぎるのだ。

だが、それはここ最近自分の周囲で起きている出来事と何か関係があるのだろうか？

それとも何か別の出来事が自分の身の回りで起きているのだろうか？

そんな事を考えながら角を曲がったとき、不意に誰かとぶつかってしまった。

「あ、ご、ごめんなさい！」

「…誰かと思ったら、瀬川さんじゃない」

そう、美由がぶつかった相手は聞き覚えがある声だった。

「あ、さ、冴木先生…」

そう、その相手と言つのは美由の高校の教師でもある冴木法子だったのだ。

「…先生この近くに住んでいるんですか？」

「…そうだけど。そんなことより、瀬川さん。あなたこんな時間まで何やってるの？」

「あ、そ、その…」

美由は慌てて右手に持っていた神剣を背中に廻した。

「…何持ってるの？」

「い、いえ、先生には関係のないものです」

なぜかわからなかったが、持っていた神剣を隠しておかないとまずいと思ったのだ。そもそも16歳の少女が持つものでもないし…。

「…本当に関係ないの？」

そう言いながら美由の背中を肩越しに見ようとする。

「で、ですから、先生に関係のないんです、本当に」

「…そう、ならいいけど。それにしても、女の子がひとりで出歩いている時間じゃないでしょう?」

「は、はい、そうですね。これから帰りますので。先生、さようなら」

そういうと美由はその場を走り去っていった。

「…はあ…」

ある通りに来たとき、美由はまたため息をつく。

しかし今度は安堵のため息だった。

「…なんか、気に入らないのよねえ…」

そう、なぜかわからないのだが、三上といい、冴木といい、自分のやっている事を知られてはいけないような気がしたのだ。

何故、そう思っているのかはわからない。しかし、あの二人に自分がPBである事を知られてはまずいような気がするのだ。

(…とにかく、もう暫く黙っておこう)

(第4話に続く)

第4話

2007年10月。

夏休みが終わり、2学期が始まった当初はこれと言った騒ぎも起こらず、美由自身もようやく騒ぎが落ち着いた、と思っていたが、今月に入ってから美由の学校で再びおかしなことが起こりだしてきていた。

と言うのも美由の通っている高校の生徒は一クラスで毎日のように3〜5人、多いときには10人近くも欠席してる状態が続いているのだ。

この日もそうだった。

朝のHRの際、美由は席を見回すと7〜8人の席が空いていたのだ。

(…:一体どうしたんだろう…?)
勿論欠席する側にも何らかの理由があるのだろうが、それにしてもこの人数の多さは異常である。

念のために、と思って他のクラスの生徒にも美由は話を聞いたことがあるのだが、どうやらこういった問題は他のクラスでも起こっているらしい。風邪やそういった流行の話は聞いていないし、何か他に理由があるというのだろうか？

*

そんなある日、美由は下校中にクラスメイトの家によることにした。

そのクラスメイトが休むなんてことは滅多にないことだし、ましてや学校に何の連絡もなく休むということは考えられず、そのクラスメイトと以前から仲が良かったこともあって美由はどうも気になったのだ。

「ごめんくださいーい」

美由が玄関の前で呼びかけると、一人の女性が出てきた。

「…あら、美由ちゃん。どうしたの？」

「あの、千恵ちゃんいますか？」

「千恵？ まだ帰ってきていないけど、そうしたの？」

「いえ、今日学校休んだからどうしたのかな、と思って…」

「休んだ？ 嘘でしょ？」

「…どうかしたんですか？」

「今朝、ちゃんとあの子学校行ったんだけど…」

「本当ですか？」

思わず聞き返す美由。

「ええ。今朝ちゃんと鞆持って学校に行っただけどね…」

「…だとしたら…」

「？ い、いえ、何でもありません。どうも済みませんでした。千恵ちゃんが戻ってきたらあたしが訪ねてきたことを伝えておいてください」

そして美由は玄関を出て行った。

その夜。

「…そうですね、どうも済みませんでした」

そして美由が電話を切る。

「…どうしたの？ さっきから電話ばかりしてるじゃない」

そんな美由の様子を見て由紀子が話しかけてきた。

「ん？ ちょっと気になることがあって…」

「気になること？ 何なの？ 話して御覧なさい」

美由は一瞬話すのを躊躇したが、美由にとって由紀子は母親であると共に、既に引退したとは言えPBの先輩でもある。相談しておいた方がいいかもしれない。

「…実は…」

と美由はここ数日、学校での欠席する生徒が多い事を話した。

「…でも聞いてみると、みんなちゃんと学校には行っている、って

言うのよ」

「…つまり、何処かで行方がわからなくなる、ってこと？」

「…うん」

「…何処かで学校をサボってる、とかそういうことは考えられない？ お母さんが美由くらの歳の頃だってそういう子いたし」

「でもそういう時、って見つかったとしたら真っ先に学校や親に連絡が行くでしょ？ 聞いてみたんだけど、そんな連絡一度も来たことない、って言うのよ。それに1日でそんなに多くの子がサボったら誰だっっておかしいと思うわよ」

「…うーん…」

思わず由紀子も考え込んでしまう。

「…となると他に理由がある、ってことよね。となると…」

「…いくらなんでもそれは考えすぎよ、美由」

「でも…」

「今の所確かな証拠もないんだし、もう少し調べてみないとわからないわよ」

「…うん…」

その翌日のこと。

美由がいつもどおり教室に入ると昨日休んでいたクラスメイトの千恵が来ていたのだ。

「千恵、おはよう」

「あ、美由、おはよう」

見た限りでは彼女の様子に何ら変わったところはない。

「…ところで千恵、どうしたの？ 昨日学校に来なかったじゃない」

「…そのことなんだけど…」

そういうと千恵は黙り込んでしまった。

「？ ……どうしたの？」

「ん？ なんでもない」

「なんでもない、じゃないでしょ？ あたし昨日心配したんだよ。」

千恵の家まで行ったんだから」

「…本当？」

「本当だってば」

それを聞いた千恵は美由から目を離すと黙り込んでしまった。

「…どうしたの？」

しかし千恵は何も答ええない。

「どうしたの、千恵？ 一体何があったの？」

「…誰にも話さないでくれる？」

「勿論。約束するわよ」

「…ちよつとこつちに来て」

そういうと千恵は美由を非常階段の踊り場まで連れて行った。

「…どうしたの、こんなところまで連れてきたりして」

「…実はその…、昨日のこと、全然覚えてないのよ」

「え？ 覚えてない？」

思わず聞き返す美由。

「うん。家を出たところまでは覚えてるんだけど、気がついたら家の前に立っていたのよ。後からお母さんに美由が訪ねてきた、って聞いたんだけど、途中で用を思い出して寄り道した、って誤魔化しちゃったけどね」

「そんな、そんなことって…。本当に何も思い出せないの？」

「本当なのよ、信じて。全然覚えてないのよ」

「…わかったわ。千恵の言うことだもん。信じてあげる。その代わり、他の人にこのことは話しちゃだめよ。あたしも誰にも言わないから」

*

「…と言うわけなのよ」

その夜。リビングには美由と義和、由紀子の3人がいた。

いくら「誰にも言わない」とは言ったものの、義和や由紀子だけには話しておこうと思っただのだ。

「…うーん。確かに気になる話だな…」

義和が言う。

「そう一度に休む、って言うのは何か他に理由があって、って考えられない？」

由紀子が言う。

「理由って？」

美由が聞き返すと由紀子は、

「もしかしたら、と思うけれど、その千恵さんの記憶がない、ってことは誰かに操られている、とかそういうことは考えられないかしら？」

「操られている？」

「…まあ、お母さんの言っていることが本当なのかどうかわからないが、マインドコントロールと言うのはコッさえ掴めば案外簡単らしいからな。もしかしたら、誰かが、何かの理由があってその生徒達を操っている、とも考えられるけどな…」

「でも、誰が、何のために？」

「それはお前が調べることだろうが」

「…確かにそうよね…」

確かにここ最近の生徒達の行動と言うのは一種の異常さを感じる。もし生徒達を誰かが操っていたとしたら…。

勿論それが妖魔の仕業かどうかはわからない。しかし…。

「…とにかく、調べてみる必要があるそうね」

*

翌日。

美由はなぜか学校の前の物陰に隠れていた。

そして校門に入ってくる生徒の様子を見ていた。

もし、クラスメイトの千恵の言うとおりでたとすると、校門の前で何かが起こるはずだ、と思ったからだ。

念のために、という事で普段は家に置いてある神剣を右手に携えている。

しかし、何事もないかのように次々と生徒達は校門から校舎の中に入っていく。

「…空振りだったかなあ…？」

そう思った矢先のことだった。

一人の女生徒が校門の前で立ち止まった。

(…何しているんだろう？)

そう思った途端、その女生徒は向きを変えると美由のほうに向かって歩いてきた。

(…やばっ！)

慌てて身を隠す美由。しかしそんな彼女にも気づかないかのようにその女性とは美由の脇を通り過ぎると道を歩いていった。

一瞬だったが、その女性との顔を見たとき、美由はただならぬものを感じた。

と言うのも視線が定まっていなかったかのような顔をしていたからだ。

(…これは、何かありそうね)

そう思った美由はその女生徒の後を気づかれないように尾いていた。

10分ほども歩いただろうか、何とか尾行に気づけなかったよ
うで、美由はある建物の前までやってきた。

「…ここは…」

そう、数ヶ月前まではここに店があったのだが、閉店して今は誰もいないはずである。

扉の前には「貸店舗」の紙も貼ってある。

と、美由が後を付けていた女生徒がその建物の中に入っていった。

(…どうしたんだろう？ あそこは今誰もいないはずなのに…)
と、そのときだった。

「…うっ！」

美由はあの悪寒を感じた。

慌ててポケットから神鏡を取り出す。と、神鏡に嵌まっている宝玉が光っていた。

「まさか、妖魔がいる、って言うの？」

しかし実際に宝玉が光っている、と言うことはそうとしか考えられない。

「…だとしたら…」

美由は意を決すると神剣を握り締めてその建物に入ってしまった。

さすがに中に入っていることもあつてか建物の中には簡単に入ることが出来た。

しかしあたりには誰もいない。

「…誰もいないのかしら…」

しかし、確かに美由が後を付けた女生徒がこの中に入っていた。

美由は息を潜め周りを見回す。

…と、奥の方で何か物音が聞こえてきた。

「…誰かいるの？」

美由はそう叫ぶと奥の方へと向かった。

「あ…」

奥に入った美由はその光景を見て思わず絶句してしまった。

何人もの男女が輪になって座っており、なにやらぶつぶつと呟いているのだ。

よく聞くと呪文か何かのようだった。

それよりも美由を驚かせたのはその男女が全員美由の通っている高校の生徒だった、と言うことだった。

もしかしたら、ここ最近起こっていた集団欠席の事件も彼らがここに来ていた、と言うことだろうか？ だとすると納得がいく。

「な、何やってるの…」

美由が聞いたそのときだった。

自分たちがやっている事を邪魔されたからか、複数の生徒達が美由のほうを睨んだ。

「うっ…」

その顔を見て思わずひるむ美由。

彼らの顔はどう見ても人間のそれとは思えなかったのだった。

そんな中、一人の生徒が美由に向かって襲い掛かってきた。

美由は慌てて真剣を鞘から取り出すが、その足が止まってしまった。

おそらく彼らは体を妖魔か何かに乗っ取られているのかもしれない。

しかし、いくら妖魔に体に乗っ取られているとはいえ、美由にとってはクラスメイトであるし、それ以前に生身の人間である。下手に殺すことは出来ない。

「…どこまで出来るかわからないけど…」

そう呟くと美由は神剣の刃のほうを自分に向けて握り返す。

一人の生徒が美由に襲い掛かってくる。

美由はそれをかわすとみね撃ちをする。

これまで一度もやった事がなかったのだが、一応父親である義和からやり方だけは教わっていたのだ。

後はもう必死だった。何とかクラスメイトを傷つけないように、と必死にみね打ちを繰り返し次々と生徒達を倒していく。

そしてようやく全員を倒し終えたとき、不意に美由の首にかけてある神鏡の宝玉が光った。

（…来る！）

そう直感した美由は再び神剣の向きを替える。

倒れている生徒達の口からなにやら霧のような煙のようなものが出てきて、それがだんだんと実体化してくる。

その前に生徒達を相手にしている、と言ったこともあってか、美由

の体力もかなり無くなっている。とは言えここで打ち損じでもしたら自分の命にすら関わってくるだろう。

(…とにかく、一撃で致命傷を与えないと…)

美由は肩で息をしながらも両足でしっかりとコンクリートの床に立つと神剣を妖魔に向ける。

妖魔が叫び声を挙げて美由に襲い掛かってくる。

美由は渾身の力をこめると神剣を横殴りに払う。

妖魔が断末魔の悲鳴を上げて倒れた。

「…！」

思わず片ひざを付いてしまう美由。

どうやら今回の相手には自分もダメージを受けてしまったらしい。神剣を杖のようにして立ち上がると少しは傷みが引いたように思えた。

そして神鏡を妖魔に向ける。

「…それにしても…」

美由は呟いた。

「…それにしても、人に憑依させるなんて、今までにこんなことなかったのに…」

そう、その存在だけは噂に聞いていたのだが、美由自身実体を見るのは初めてだった。

そのときだった。

「…そういえば！」

美由はあることに気が付いた。

「そういえば、お父さんが妖魔って言うのは自分から人に憑依するようないことは出来ない、って言ってたっけ。だとすると…。誰かが妖魔を操ってみんなを憑依させた…」

そうとしか考えられない。となると、この妖魔を操っている人物が他にいるということか？

そのときだった。

「……っ！」

美由は例の「悪寒」を感じた。

慌てて辺りを見回す。

しかし辺りは誰もいなし。

とは言え、何者かが自分の事を見ているような感じがしたのは事実だった。

「……でも、誰かが見ているような気がしたのよね……」

そう、なぜかわからないが、この春からこういった妖魔退治をした後にこのような悪寒を感じたことが多くなっている。

そのたびに誰から自分の事を見ているような感じがしたのだ。

もしかしたら何者かがずっと自分を監視しているのか、自分の知らないところで別のことが進行してる、と言っのだろうか？

美由はよくわからなかった。

(第5話に続く)

第5話

「…どうやら、アイツらしいな」

「そうね。瀬川美由、彼女は前からそうじゃないか、と思っていたんだけど」

「だろうな。彼女は何も言っていなかったようだけど、彼女以外考えられないな」

「…それで、一体どうするつもりなの？」

「決まっているだろう。邪魔者は始末するしかない」

「…全く。あんな可愛い女の子までやらなきゃいけないなんてね…」

*

例の事件 美由のクラスメイトが美由に襲い掛かる事件 数日が過ぎたある日のこと。 美由が高校に来て、HRの終わりかけた時、不意に担任が、

「あ、そうだ。そういえば今朝、三上先生から連絡があつて、今日は急用が出来たので休ませて欲しい、とのことだった。そのため、今日の1時間目は自習と言うことになる」

それを聞いた瞬間、生徒がざわめきだした。

「…どうしたんだろう、三上先生」

「急用って何だろうね…」
と、

「静かに！ とにかく今日の1時間目は自習と言うことになる。いいいな」

そついうと担任の教師は教室を出て行った。

だが、事件はこれだけではすまなかった。

さらに昼休みが終わり、午後の最初の授業が始まるつとしていたときだった。

「次は…冴木先生の授業ね」

その名前を聞いた美由は顔をしかめる。

三上と冴木の二人が扮してから半年経った今でもどうも馴染めなかったのだ。そのせいかどうか知らないが、三上や冴木の授業となると結構美由が当てられることが多いのだ。

幸い今日は三上が休みという事でその心配はなかったのだが…。

そんな事を考えていると、始業のチャイムが鳴って間もなく、教室には別の教師が入ってきた。

一体何事か、とその場に居た生徒達全員が思った。

「…今日の冴木先生の授業ですが、実は今朝、冴木先生から今日は休ませて欲しい、と言う連絡がありました。ですので、今日の授業は自習とします」

「え〜?」

その瞬間、なんとも言いようのないどよめきが起こった。

「…そういえば今日、三上先生も休んでたよね」

「珍しいわね。一日に2回も自習があるなんて…」

その自習中のとき。

(…それにしても…)

美由はふと思った。

(…なんでふたりとも急に休んだんだろう…)

いや、勿論偶然なのかもしれないが、美由にはそれがどうも「偶然」とは思えなかったのだった。

先日の生徒達が大量に休む事件の時は美由が妖魔を退治してからはそういった出来事も無くなったのだが、とは言えあの時何故突然生徒達が大量に休んだのか、美由自身色々調べてみたのだがわからない部分が多かった。

さりげなくあの事件の際に美由に襲い掛かってきた生徒達に聞いても 美由の友人である千恵の時と同じように 何も覚えていない、と言っているのだ。

(…もしかしたらまだあたしの知らないところで、まだ何か起こっているんじゃない?)

そこまで考えた時、終業のチャイムが鳴った。

「あ…、終わりか…」

*

そしてその夜のことだった。

美由たちはTVのニュースを見ていた。

「…それでは次のニュースです。今朝早く、都内の駐車場でPBの遺体が発見され、警察が捜査を始めました」

「…PBの遺体ですって？」

思わず由紀子が声を出した。

「…なんか最近増えてきているな」

義和も言う。

そう、義和の言うとおり、最近美由の住んでいる街の周辺でPBが死体で発見される、と言う事件が次々と起こっていたのだ。

「…そうね。確かにPBの仕事と言うのも場合によっては命を落とすこともあるから危険ではあるけれど、こつても命を落とす人が多いなんて…」

由紀子が言う。

「何だか聞いた話だと、死体はどれもこれも胸を一突きにされていたそうだが、どうもそれが刃物とかそういうもので突かれた様な傷じゃないらしいんだ」

「どういうこと？」

美由が聞く。

「うん。お父さんも話を聞いたただだからよくわからないんだが、杭だかそういうったようなもので突かれた様な傷らしいんだ。そんなので突かれたら、まあ、間違いなく即死だな。PBといつても中身は普通の人間だからな」

「怖い…」

「そうなるよ、かなり手強い相手であることは間違いないだろうな。」

よっぽど心してかからないといけないうらな」

「美由も気をつけなさいよ。あなたはまだPB初めて2年も経っていないんだからまだまだ不慣れな部分も多いんだし、その、胸を刺されて死んだPBの中には二十歳位の女の人もいた、って話よ」

「わかってるわよ」

そんな親子の会話をしている前でTVがニュースを続けていた。

「…また、この場所では先日も死後半年以上経過した、と思われる白骨死体が発見されており、警察では事件の関連を調べています」

「…この事件もそのひとつかしら」

「まさか、いくらなんでもそんなことはないだろう」

*

その翌日。授業のチャイムが鳴り、教室に昨日のことが何もなかったかのように三上が入ってきた。

「きりーっ！ 礼！」

そして生徒が座るとある生徒が、

「…三上先生、どうしたんですか？」

「…どうしたって？」

「いえ、昨日急に学校を休んだりするから」

「ああ、それか。…いや、大した事じゃない。あくまでも先生の私用だったから、君たちは心配しなくていい」

「そうですか…、いや、冴木先生もお休みだったからどうしたのかな、って思ってた」

「ああ、その事も冴木先生に心配しなくていい、と伝えておいてくれ、と言われていたよ。…それじゃ授業を始めようか」

そのときだった。

「…！」

美由は全身にあの「悪寒」を感じたのだった。

「…？ どうした、瀬川」

三上が美由に聞いた。

「い、いえ、何でもありません」

口ではそういったが、美由は何か得体の知れない不安を感じた。

(…なんだろう、この感覚は…、それに…三上先生の目…)

そう、美由は三上が話しかけてきたとき、自分を見る目に何か冷たいものを感じたのだった。

(…三上先生のあたしを見る目、何か普通の感じじゃなかった。一体どういうことなの？)

そのときだった。

(…まさか！)

美由はひとつだけ思い当たる可能性があった。

(…ま、まさか、そんな馬鹿なことはないわよ…)

*

そして翌日の朝のことだった。

登校前に少し時間があつた、という事で美由は何気なくTVをつけた。

「…それでは次のニュース。先日発見された2体の白骨死体の身元が判明し、捜査を始めました」

「ふうん…」

ところが次の瞬間、美由が創造もできなかった事をそのニュースキャスターは言った。

「…警察によるとこの二人は、都内在住の三上公平さんと冴木法子さんの二人と見られており、警察では二人が何らかの事件に巻き込まれたと見て捜査を始めました」

「…三上と冴木、って…、ウチの学校の先生と同じ名前じゃない」

「…また、三上さんと冴木さんはこの春に都内の高校に赴任の予定であり、警察では関連を調べております」

そして、その死体で見つかった、と言う二人の顔写真がTVの画面に映った。

「…え…、嘘…」

思わず絶句する美由。

そう、その二人の顔写真は紛れもなく、自分の学校の教師である三上公平と冴木法子の写真だった。

(…ま、まさか、そんなことは…)

この二人は間違いなく、昨日自分が授業を受けた教師である。その教師が半年も前に死んでいたのか？

(…これって、一体どういうことなの…?)

ニュースが終わったあと美由は暫く呆然としていた。

「…美由、どうしたの？」

そんな美由を見て由紀子が話しかけてきた。

「う、ううん。なんでもないの。行って来ます」

そう言つと美由は玄関を飛び出していった。

*

「美由、おはよう」

クラスメイトが美由に話しかけてきた。

「あ、お、おはよう」

慌てて挨拶を返す美由。

「…どうしたの、美由？　なんか考え事しているみたいだけど」

「うん？　い、いや、なんでもないの」

美由は他人を不安にさせたくない、と思ったからか「例のこと」については話さないでおこうと思ったのだった。

いや、勿論今朝のニュースを見ていた生徒もいたかもしれないが、しかしまだ何の確証も得ていないこともあるし、自分の考えもまだまとまっていなくてよかったからだ。

暫くしていると教室に冴木が入ってきて、授業が始まった。

今朝のあのニュースを見てからだろうか、美由は冴木や三上が何だか得体の知れない人物に思えてきたのだ。

勿論、あのニュースはたまたま同姓同名の人物の死体であり、写

真と言うのも見ようによつてはそっくりなものに見えてしまう部分もあるのだろうが、しかしそんなに偶然が重なるだろうか？

(…一体、三上先生や冴木先生、って何者なんだろう…)

美由はその日、授業が終わるまでこの事を考えっ放しだった。

*

その夜。

「お父さん、お母さん、ちょっといい？」

そう言うと美由は義和と由紀子と共にリビングルームに座った。

「…一体どうしたんだ？」

「ちょっと気になることがあって…」

「気になること？」

「…実はね…、三上先生と冴木先生のことなんだけど…」

「…確かお前の学校の先生だろ？ その先生がどうした？」

「実は…」

そう言うと美由は今朝から思っていた事を義和と由紀子に話した。

「…それは本当か？」

「思わず聞き返す義和。」

「…まさか同じ名前で容姿も全く同じような人の死体が見つかるなんて…」

由紀子も言う。

「うん。だからあたしにはどうも偶然には思えないのよ」

「しかし、だとしたら、どうしてそんな事を行ったんだ？」

「よくわからないけど、もしかしたらここ最近のPBが殺されている事件となんか関係があるんじゃないか、って思ってる…」

「…そうかもしれないが、大丈夫なのか？ ここまで来るともうお前の手には負えなくなるかもしれないぞ」

「でもあたしの学校の先生だもん。どうしても放っておけないわよ」

「…まあ、お前がそこまで言うなら調べるのは構わないが…」

「本当に気をつけるのよ」

「うん。わかったわ」

*

そしてその次の日の夕方だった。校舎の外れにある体育倉庫の扉の前に美由は立っていた。そして辺りを見回すと扉を開け、その中に入っていた。

薄暗い室内にはどこの高校でもあるようなハードルやバレーボールに使うネット、ボールなどが置いてある。

美由はその体育倉庫の片隅に近づくとボールが入っているかこの奥に手を入れるとその中から一振りの剣を取り出した。そう、例の神剣である。いつもは家に置いてあるのだが、今日はどうしてもやりたい事があったために、家から持ってきたのだ。

勿論いくら美由がPBだと言うことをみんな知っているとは言え、こんなものを持ち歩いていたら何を言われるかわかったものではないから、今日は早めに学校に来て体育倉庫の中に隠しておいたのだ。そして美由は辺りを見回すと体育倉庫を出て、駆け足で校門の外に出た。

そして物陰に隠れると、校門の様子を伺っていた。

それからどのくらい待っただろう。

「…出てきた」

美由が呟いた。

そう、校門から三上が出てきたのだった。

美由はその後を悟られないように着いて行く。

*

どのくらい歩いただろうか。

不意に美由は三上の姿を見失ってしまった。

「…しまった！」

美由は三上を見失ってしまった場所に来ると辺りを見回す。

「…さつきまではちゃんとつけていたのに…」

そう、このあたりは相手を見失うほど複雑に道が入り乱れている

訳でもないのに、どういうわけだが、見失ってしまったのだった。

と、そのときだった。

不意に、美由のかけている神鏡の宝玉が光った。

「…これは…」

「…何をやっているんだ、瀬川？」

美由の背中で聞き覚えのある声が出た。

慌てて後ろを振り向く美由。

「…み、三上先生…」

そう、美由の目の前に三上公平が立っていた。

「…何をやっているんだ、瀬川？」

「い、いえ、なんでもありません」

「なんでもないだと？ それが人を尾行していたもの言う言葉か？」

「尾行、って…」

「…お前がついてきていたのは途中からわかっていたんだ」

「う…」

それを聞いた美由は黙り込んでしまった。気づかれていたとは美由も考えていなかったのだ。

「瀬川、やっぱりお前、PBだったのか」

「そ、それは…」

「あの学校に教師として来た時、何か得体の知れない感覚があったんでね。それから色々調べてみたら、どうやら学校にPBがいると言うことがわかったんだ。そしてお前がPBだと言うことがわかったんだ」

「じゃあ、三上先生は…、い、いや、あなたは本当の三上先生じゃないんですよね？」

「…そうか、そこまでわかっていたか」

美由は神剣を抜こうとした。

と、そのとき後から何者かに手を抑えられて、逆手にねじ上げら

れてしまった。

「い、痛いっ！」

「無駄な抵抗はやめなさい、瀬川さん」

「その声は、冴木先生……」

そう、冴木法子が美由を後から捕まえていたのだ。

彼女は女性とは思えない力で美由のねじ上げた手に力をこめる。

「……！」

その痛さに悲鳴も出ない美由。

それを見ていた三上がゆっくりと近づく。

次の瞬間、美由の鳩尾に三上の拳が当たった。

「……うっ……」

美由が足から崩れ落ちる。

しかし、美由の「本能」がそうさせたのだろうか、無意識の内に自分の首にかけてある神鏡の紐を引きちぎると、それを遠くに放り投げていた。

おそらくそれを見つけた誰が助けに来てくれるであろう、と思っ
て。

「……おねが……い……、だれ……か……たす……け……て……」

そして美由は気絶してしまった。

(第6話に続く)

第6話

「…なんだって？ それは本当なのか？」

義和は由紀子から「美由の行方がわからなくなっている」と言う事を聞いて思わず聞き返した。

「…そうらしいわ。美由の友達に聞いてみても心当たりがない、って言うし、美由の携帯にも繋がらないのよ」

「…それにしても、一体どうしたんだ…」

「その、美由の友達の話では、放課後に校門のところで見かけた、って何人かが言っていたんだけど、そこからの足取りがわからないのよ」

「…もしかしたら…」

「…もしかしたら、ってどうしたの？」

「いや、ちよつと気になることがあってな」

「気になること、って。…もしかして美由の学校の先生のこと？」

「知ってたのか？」

「たまたまテレビでそのニュースを見たから。もしあの先生たちが私の考えている通りだとしたら…」

「…だとしたら、美由が危ない！」

そんな2人のやり取りを傍らで二人の息子であり、美由の弟である和也がさつきからじつと見ていた。

勿論、和也も自分の姉が行方不明、と言うのが気になっていた。

「…とにかく、美由を探そう」

義和が由紀子に言う。

「わかったわ。…和也、お姉ちゃんから何か連絡があるかもしれな
いから、和也はここにいろのよ」

「う…うん」

そして義和と由紀子は家を出て行った。

*

「…う、うっん…」

美由はゆっくりと目を開けた。

「…ここは…どこ…?」

次第に視界がはつきりするにつれ、あたりのものが目に入ってきた。

美由の目の前にはなにやら長椅子のようなものが並び、向こうにはステンドグラスのようなものが見える。

「…ステンドグラス…? ってことはここは教会かしら…」

何で自分が教会にいるのかよくわからなかった。

そして美由は体を動かさそうとする。

しかし体が動かない。

「…え?」

慌てて美由はあたりを見回す。

「…!」

自分の状態に思わず絶句する美由。

なんと美由は教会の祭壇で両腕を広げ、両足を揃え、十字架に磔にされていたのだった。そしてすぐそばには彼女の使っている神剣が転がっている、と言っのにこれでは拾いにもいけない。

「…い、一体どういうこと?」

教会に人間ひとりだけを磔にできるような十字架は普通ないはず。となるとこれは自分を磔にするために誰かが作ったのだろうか? そんな事を考えていると、

「…気がついたようね、瀬川さん」

美由に向かって聞き覚えのある声が出た。

「…さ、冴木先生…」

そう、美由の目の前に冴木法子が現れた。

*

和也は家の時計を見ていた。

もうあれから1時間以上経っているが、相変わらず美由から何の

連絡もないし、義和からも由紀子からも何の連絡もない。

「…お姉ちゃん、どうしたんだろっ…」

和也はさつきから何度もこの言葉を呟いていた。

普段PBとしての姉を見ている和也にとつて、美由は姉であると共に憧れの存在でもあった。そして両親からも自分が「PBになれる力を持っている」と聞き、いつか自分もああいう風になりたいと思っている存在だったのだ。

その姉が今行方不明になっている…。

「…お父さん、お母さん、ごめんなさい！」

居ても立ってもいられなかった。

和也は決心すると自分も姉を探すため家を飛び出していた。

*

「…先生、一体これはどういうことなんですか？」

「どういう、って？ 見たとおりよ」

「見たとおり、って…。あたしをどうしようと言っんですか？」

「決まってるじゃない。邪魔者のあなたを始末するのよ」

「始末、って…。先生たちは何が目的なんですか？」

「目的？ そんなもの別にないわよ」

「え…？」

その言葉に思わず絶句する美由。

「…私たちはただやりたい事をやっているだけ。それなのにPBは余計な邪魔をしているのよ」

「…じゃあ、今までPBを殺したのも…」

「そう、あれも私達。彼らに私達の邪魔をして欲しくなかったのよ」

「…」

「でも本当に驚いたわ。まさかあなたがPB、って知った時は」

「…それじゃあ…」

「そう、今年の春頃だったかしら。あるPBを始末した時、このあたりに10代なのにPBとなっている子がいる、って噂を聞いたの

よ。どうやら高校生らしい、ってことまではわかったんだけど、そこから先がわからなかったのよ。丁度その頃だったかしら。ある高校に赴任する教師がいる、って話を聞いて、それが丁度男女一組だったから、私達が彼らに代わってやってきた、と言うわけ」

「それじゃあ、あの本物の三上先生と冴木先生を殺したのも…」

「そうよ、あれも私達がやったこと。もっともこんなに早く死体が見つかるとは予想しなかったけどね」

「…」

「それから私たちは色々調査してみたの。面白いものね。高校の先生、という事で安心しきったのか、みんな私達に色々と話してくれたわ。その話と生徒達の行動を調べていったら瀬川さん、あなたがPBだということがわかったのよ。そしたらもう後は簡単。あなたを始末するだけですもの」

美由はようやくわかった。

あの「悪寒」の正体も、こうして人間でない、妖魔が化けた者達がすぐそばにいた結果だったのだ。何でこんな簡単なことに半年も気がつかなかったのか。

美由は自分の迂闊さを悔やんでいた。

*

和也は辺りを見回した。

そのとき、道端で何かキラッ、と光るものを見つけた。

「…?」

和也はその方向に近づくと、その光ったものを拾い上げた。

「…これは…、お姉ちゃんが使ってる鏡だ!」

そう、それは美由が肌身離さず持っている神鏡だった。

勿論和也だってそれがどういいうもので、姉が何故持っているかはわかってるつもりだったが。

そのときだった。

「…え?」

和也は今来た道を振り返る。

「…あつちにお姉ちゃんがいる、って言うの？」

和也は神鏡をじっと見る。

なぜかわからなかったが、神鏡が自分に話しかけているような気がしたのだ。

「…わかった。行ってみるよ！」

そう言うのと和也は神鏡を片手にその方向へ走り出した。

「ここは…」

和也はある教会の前で立ち止まった。

神鏡に導かれるかのようにここまでやってきたが、ここに姉がいるというのだろうか？

「でも、ここは確か去年、この教会にいた神父さんが死んでから、誰もいないはずなのに…」

そして和也が教会を見上げた時、

「…え？」

また神鏡が話しかけてきたような感じがした。

「…本当にここにお姉ちゃんがいるの？」

そして和也は意を決すると、教会に向かって歩いていった。

*

「…もうその辺でいいだろう」

不意に男の声がした。

「み…、三上先生…」

そう、美由の目の前に今度は三上公平が現れたのだ。

「あら、冥土の土産に私達の事を話していたのに…」

「もう話はそのくらいでいいだろう。早く始末しないと怪しまれるぞ」

「そうかもしれないわね」

そう言うと冴木は美由の前に立ち塞がった。

「な…何をするんですか？」

冴木は何も言わずに右手を振り上げた。

「…！」

美由は思わず絶句した。

そう、彼女の右手がコンピューターでモーフィングしたかのように鋭い刃に変わったのだ。

そして冴木は美由の体に振り下ろす。

「いやあああああ！」

美由が叫び声を上げる。

しかしその刃は美由が着ていた制服のブラウスとスカートを引き裂いただけで、身体には傷ひとつ着いていなかった、

冴木は薄笑いを浮かべると美由のブラウスの胸の部分をはだける。その勢いで彼女が身に着けていたブラジャーも切れてしまったか、美由の胸が露わになってしまう。

「あああら。大きくはないけど、形のいいおっぱいをしているのね」
「や…やめて…」

同性とは言え（実際には男もいるが）、胸を見せていることの恥ずかしさ、何も出来ない悔しさ、自分がこうなっていることに対する悲しさ、そういったものが入り混じって美由の目から一筋の涙が伝って落ちる。

「…なんか傷を付けるのも勿体無いけど、やっちゃいなさい」
「わかっている」

三上が表情ひとつ変えず美由の前に立つ。と、三上の右腕は鋭い円錐形の錐状のものに変化した、

その瞬間、美由はこれまで起こっていた謎の穴の正体について悟った。

おそらく、今までの穴は三上が試し切りのつもりで貫通させたものに違いない、と。

そしてこれまでのPB殺害に使ったのも…。

三上が右手を振り上げる。

美由は覚悟を決めると目を閉じた。

そのときだった。

「お姉ちゃん！」

外から聞き覚えのある声がした。

何事か、と声のする方向を全員が見た。

「…和也！」

そう、入り口に立っているのは間違いなく弟の和也だった。

「和也、ダメよ、来ちゃダメ！ お姉ちゃんはどうなってもいいから早く逃げて！」

まさか自分を助けに来たのが弟だったとは美由も予想が出来なかったのだった。

「和也？ ……そう、あなたの弟なのね。和也君、お姉ちゃんの言う通りよ。あなたのことを見逃してあげるから早くお逃げなさい。私は余計な人を殺したくないのよ」

「…お姉ちゃんに何を！」

そう叫ぶと和也は美由たちの元に走ってきた。

「…仕方ないわね。先に始末して！」

その声に三上は頷くと和也の前に立ち塞がった。

「…お姉ちゃんを放せ！」

そう叫ぶと和也は三上に掴みかかった。

しかしいかんせん大人と子供である。体格差もあるし、とても和也の相手になるような人物ではなく、あっと言う間に和也は転がされてしまった。

「やめて！ 和也には手を出さないで！」

美由が叫ぶ。

「勢いだけはよかった子ね。…こうなったらこの子に先に地獄に行ってもらうことにしようかしら」

「やめて！ 殺すならあたしだけにして！」

美由は泣き叫んでいた。

「心配しなくていいのよ。すぐに会わせてあげるわ」
すると三上が床に転がっていた美由の神剣を拾うと鞘から刀を取り出し、和也にその切っ先を向ける。

「やめて！ 和也を殺さないで！」

しかし美由の必死の叫びもむなしく、三上は剣を振り上げ、和也に向かつて振り下ろした。

「和也ああああ！」

美由の悲痛な叫び声がこだました。

そのときだった。

「…！」

和也の体からまばゆいばかりの光が発せられた。

そのまぶしさに思わず目を覆う三上と冴木。

そしてその弾みで三上は神剣を落としてしまう。

「…和也…」

美由が呟くと、ゆっくりと和也が立ち上がった。

その光はますますと強くなってきているように見える。

「…まさか…」

*

なぜかはわからなかった。

和也は自分の体の中から力が湧いて来ているような気がした。

「…これは…」

そして和也は辺りを見回した。

三上が落とし、床に転がっている神剣が和也の目に入った。

「…え？」

なぜか自分に「この剣をとれ」と神剣が話しかけているような気がした。

和也は神剣に目を落とすと再び三上のほうを見る。

「この野郎！」

三上が和也に襲いかかる。

しかし和也は自分でも信じられないくらいのすばやさで横に飛ぶと、落ちていた神剣を拾う。

そして自分に向かって襲い掛かった三上に向かってなぎ払った。

「くっ…」

三上がひざを付いて倒れる。しかし、和也はそんな三上に目もくれずに、

「お姉ちゃん！」

と美由の十字架に近づくと、両腕と足を縛っていたロープを神剣で切る。

「和也、大丈夫？ 怪我はない？」

やっと自由になった美由が話しかける。

「う、うん。…あ！」

そう言うのと慌てて和也は目をそらす。

どうして和也が目をそらしたのか一瞬美由はわからなかったが、

「あ…」

そう、美由は胸をはだけたまま、破れたスカートの下からは白いショーツが和也にまる見え、と言う格好だったのだ。

どうやら和也のことが心配で、そっちの方に注意が行っていないかったようだ。

美由は慌てて服装を整える。

「あ、あとお姉ちゃん、これ」

目をそらしたまま和也が神鏡を美由に差し出す。

「あ、ありがとう和也。後はお姉ちゃんに任せて、和也は安全なところに行つて」

「う、うん」

そう言うのと和也は物陰に隠れた。

「…冴木先生。いや、冴木先生に化けた妖魔。今まであたしが受けた屈辱、そしてあなたの勝手な理由で命を奪われた本物の冴木先生の分も倍にして返すわ！」

そう言うと美由は神剣を構える。

「く……」

見る見るうちに冴木の顔が憎悪に満ちた表情に変わっていく。

「死ねえええ！」

冴木が美由に向かって鋭い刃に変わっている右腕を振り下ろす。

しかし美由は渾身の力をこめて神剣で跳ね返すと袈裟懸けに冴木を切り付けた。

断末魔の悲鳴を上げる冴木。

そして美由は神鏡を倒れている二人に向ける。

2人はあつという間に神鏡の中に吸い込まれていった。

「ふうっ……」

一安心したか、美由がため息をついたそのときだった。

「美由、怪我はないか？」

「和也、大丈夫？」

そう言いながら義和と由紀子が飛び込んできた。

「うん。あたしも和也も大丈夫よ」

義和は美由の格好に気がつくくと、来ていたジャンパーを脱いで美由に渡した。

美由がそれを羽織る傍らで由紀子が和也に、

「ダメでしょ、和也。家にいなさい、って言っていたのに……」

「……ごめんなさい。でもどうしてもお姉ちゃんが心配で……」

「和也の気持ちもわかるけど、お母さん達だって心配したのよ。ね、こんなことしないの」

「……それにしても、妖魔がお前の学校の先生に化けていたとはな……」

「そういえば、上級の妖魔は人間に姿を変えることが出来る、って言う話を聞いたことがあったわ。おそらく美由の学校の先生に化けて調べていたのかもしれないわね」

「おそらくな。これからも気をつけなければいけないだろうな」

と、美由が何かを思い出したかのように、

「……そうだ。お父さん、お母さん。和也が覚醒したんだよ」

「え？」

「あたしもびつくりしちゃった。でも、和也が覚醒したんだよ」
「本当なの、和也？」

由紀子が和也に話しかけた。

「う、うん。なぜかわからないんだけど、体の中から何か力があふれ出てきている様な気がしたんだ…」

「それでね、和也は妖魔を一人倒したんだよ」

「…どうやら本当に覚醒したようだな…」

義和が呟く。

「じゃあ、ボクも…」

「ああ、お前もPBになることが出来るんだぞ」

「本当？」

「そういう和也の顔がほころんだ。」

「…とにかく、みんな無事でよかったし、ひとまず帰りましょう」

「ああ、そうだな」

そして義和の運転する車に4人が乗り込んだ。

車の中。

「…お姉ちゃん…」

後部座席に美由と並んで座っていた和也が話しかけてきた。

「…なに、和也？」

「その…、ごめんなさい」

「何謝る必要があるの？ お姉ちゃん、和也が助けに来てくれて嬉しかったんだよ」

「…本当？」

「本当だって。助けに来てくれたときの和也、凄く格好良かったよ。お姉ちゃん、和也みたいな弟がいて本当によかった、って思うよ」

「…そう…」

和也はまだ何か気にしているようだった。

「？ どうしたの？」

「…その…、ボク、お姉ちゃんのおっぱいとパンツ見ちゃった…」
そう言つと和也は黙り込んでしまった。

いくら実の姉とは言え、16歳の少女の胸や下着と言つのはまだ
10歳の和也にとっては刺激が強かったようだ。

「それは、その…」

美由は一瞬どう言つたらいいのか迷つてしまったが、

「…いいの。お姉ちゃんが見せたんだから」

「え？」

「…和也が、お姉ちゃんを助けてくれたご褒美に見せてあげたの。
だから気にすることないのよ」

そう言つと美由は和也に作り笑顔で微笑みかける。

それを見た和也もようやく美由に向かって笑いかけた。

(…でもよかつた。和也が無事で…)

自分が助かつたことよりも、美由は弟の和也が何事もなかつたこ
との方が嬉しかった。

まさかあそこで和也が「覚醒」するとは思わなかつたが、やはり
彼女にとって和也は大切な弟だったのだから。

弟の和也に何かあつたら姉である自分がどんな事をしてでも守つ
てあげたい、と思うように和也も姉である自分に何かあつたら守つ
てあげなければ、と思つていたのである。

(…和也なら任せられるかもしれないな…)

美由はそう思った。

(エピソードに続く)

エピソード

2014年、秋。

「和也、聞こえる?」

美由の声がトランシーバーから聞こえた。

「聞こえるよ!」

「覚醒」から7年、17歳となり、今やすっかり逞しい若者に成長した和也が答える。

「今、そっちへ行ったわよ。後はお願い!」

「わかった!」

そして和也は神剣を構えた。

中学に入るとともに姉とともにPBをやることになった和也だが、そのときから自分が男だから、と言うこともあるのだろうか今日に至るまでずっと神剣のほうを担当しているのだった。

最初の頃はどちらかと言うと神剣に振り回されている感じもしたのだったが、中学を卒業するころにはようやく使い慣れたか、今では自分の手足のように扱えるから不思議である。

と、和也の前に妖魔が現れた。

「てやああああ!」

和也は己に気合を入れるかのように叫ぶと妖魔に向かっていき、妖魔に向かって横殴りに神剣を払う。

断末魔の悲鳴を上げる妖魔。

和也は向きを変えると背中から袈裟懸けに今度は切りつけた。

「和也っ!」

美由が和也の元に駆けつける。

和也は促すかのように姉に向かって頷く。

美由が神鏡を妖魔に向け、妖魔がその中に吸い込まれていった。

「さ、帰ろうか」

美由の言葉に和也が頷く。

*

帰りの車の中。

「ねえ、和也」

運転席に座っている美由が助手席の和也に話しかけた。

美由もすでに23歳。働きに出ている、と言うこともあるのだから、その顔つきもあどけなさが消え、すっかり大人になっていた。

「…何？」

「…どうするの、大学の推薦入試？」

「うん…、先生は是が非でも受ける、って言ってるんだけど…」

そう、和也も高校3年生となり、姉と共にPBをする傍ら、勉強のほうもかなり成績がいいようで、ある大学の推薦入試を受けないか、と言う話が来ていたのだった。

「お姉ちゃんも受けた方がいいと思うな。だってお姉ちゃん、PBが忙しくて大学行けなかったし、お父さんやお母さんも受ける、って言っているんでしょ？」

「…まあ、そうなんだけど…」

「だったら受けたほうがいいと思うな。それに、授業は選択式なんだから、大学へ行った方がかえって時間が取れるんじゃない？ まあ、最後に決めるのは和也だけだよ」

「…まあ、受けようかとは思っているんだけど」

「だったら受けなよ。こんな機会めったにないんだからさ」

と、姉と弟ということもあってか、こんな風に帰りには二人はそれまでの仕事のことはまったく話さずに家に帰っていたのだった。

一通りの話が終わった頃だった。

「…ねえ、和也」

「…どうしたの？」

「…和也にだけは話しておこうと思うんだけど、実はお姉ちゃん、結婚しようか、って思ってるんだ」

「え…？」

姉の発言に思わず絶句する和也。

「…この間言っていたPBの人？」

「うん」

美由が頷く。高校を卒業して、会社勤めを始めた頃にひよんなことからあるPBの男性と知り合い、時々その人と美由がデートをしていたことは和也も知っていたが、いつの間にか自分の姉はそんなことまで考えていたのだろうか？　そしてそこまで話が進んでいたのか？

「…実はさ、この間プロポーズされちゃったんだ。その人、ずっと一人でPBやっていて前からパートナーが欲しい、って言ってたんだ。だからお姉ちゃんがその人のPBと人生、両方のパートナーになってあげようかな、って思ってるの。お父さんたちだってもともと二人でPBやってて、結局それがきっかけで結婚したんだしね」

「でも…」

「…何か不安なことがあるの？」

「…お姉ちゃんが結婚したら一人でやらなきゃ行けない、ってことでしょ？」

「心配ない、って。一人でもやって行けるよ。お姉ちゃん、5年半和也と一緒にやってて思ったんだけど、もう和也は一人でも大丈夫だと思う。お姉ちゃん、もう和也に教えることは何もないよ。それに、お姉ちゃんが和也くらいの歳にはもう一人でPBやってたんだよ」

「お姉ちゃんが一人でやってたの、って高校の3年間だけでしょ」

「…そう言えばそうだったね」

思わず美由が苦笑する。

そう、美由が高校を卒業したころ、ちょうど和也も小学校を卒業したこともあって、和也が中学生になるとともに美由は両親に頼まれたとおり、和也の先生として姉弟でPBをやっていたのだ。そしてそれからもうあつという間に5年半と言う月日が流れた…。

その5年半の間、美由も驚くほど和也は成長を遂げた。いつの頃からか美由のほうが和也に助けられている気すらするようになったのだ。

「でも、和也なら一人でももう大丈夫だよ。…お姉ちゃん、和也が覚醒した日のこと、今でもよく覚えてる。そのとき思ったんだ。和也だったらお姉ちゃんを超えるPBになれる、って」

「超える、ってそんなこと…」

「和也なら大丈夫だって。これはお世辞でもなんでもない。それに、今度は和也が先生になる番だと思うんだ」

「先生、って？」

「お姉ちゃんに子供ができたなら、和也にその子の先生になって欲しいんだ。PB同士の間で生まれた子供はほぼ間違いなくPBの素質があるってことは和也も知ってるでしょ？ だから、お父さんやお母さんがお姉ちゃんに、そしてお姉ちゃんも和也に教えてきたことを今度は和也がその子に教えて欲しいのよ」

「…」

「お姉ちゃんがお父さんと一緒にやってた頃、お父さんがお姉ちゃんに言った言葉で今も覚えている言葉があるんだ。『人間がいる限り、妖魔もいなくならない。だから人間はこれからも妖魔と戦っていかねければ行けないんだ』ってね」

「…」

「だから、PBはこれからも妖魔と戦っていかなきゃ行けないし、お姉ちゃんも和也もその血を持って生まれたんだから、これからもずっと戦いは続くと思うんだ」

「…」

「…和也、お姉ちゃんの言っていることわかってくれるよね？ お姉ちゃん結婚しても和也のことは応援するから」

「…わかった。これから一人でやってみるよ」

「そう、よかった」

そして二人を乗せた車は家路に着いた。

*

そして十数年後、結婚した美由とその夫である男の間に生まれた子供とその先生となった和也の二人が組んで、また新たな戦いが始まるのだが、それはまた別の機会に。

(終わり)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1288b/>

Phantom Buster MIYU

2008年11月7日06時58分発行